

中学校特別支援学級の「自立活動」における音楽療法的活動の実施と検討

和歌山大学教育学部：(研究代表)上野 智子 菅 道子 山崎由可里
岩出市立岩出第二中学校：大植 祥子

1. 研究の趣旨

本研究は、大学教員と公立中学校教員との連携による音楽を活用した「自立活動」の実践を通して、特別支援教育において「音楽すること」の可能性や支援の在り方を解明することを目的としている。本年度は共同研究の1年目であることから、音楽を活用した「自立活動」の実践を通して、大学教員と中学校教員の間で意見交換することを目的に取り組んだ。

2. 研究経過 と授業実践の概要

研究経過を以下に示す(表1)。

表1 2023年度の研究経過

回	月日	内容
第1回	7月3日	打ち合わせ (生徒の実態等についての共有)
第2回	12月4日	授業の実施と振り返り

今年度は、1学期に生徒の実態について打ち合わせを行ったが、予定調整が難航し、授業は12月に実施することになった。初回であることから、生徒たちが音楽活動にスムーズに参加できるか分からなかったため、プログラムは暫定的に設定し、当日の生徒たちの興味関心を探ることも目的に含めて実施した。当日の参加者は、特別支援学級1年生の3名と中学校教員2名、大学教員2名の計7名である。結果的に実施されたプログラムは以下のとおりである。

1. はじまりのうた 《Hello, Hello, Hello》
2. 色々なたいこをたたこう 《シェイク シェイク ミュージック》→好きな曲について話す→打楽器で即興
3. 絵を描いて、音をつくって、みんなであわせよう (Chrome Music Lab:KANDINSKY)

「1. はじまりのうた」では、生徒は3人とも着席できたものの、途中で応答のやり取りをする場面では1人はスムーズに太鼓で応答することができ、1人は口頭で「できない」と伝えた後、次の生徒に順番が移った際に「固いのかな…」と言いながら大学教員が持っていたキッズジャンベの面を指先で軽くトンと鳴らした。そして最後の1人は、首を横に振って叩かないという意思表示をした。このように、抵抗を示す状況から活動は始まった。

そして「2. 色々なたいこをたたこう」では、ジャンベやトゥバーノ、カホンなどの楽器を用意して《シェイク シェイク ミュージック》に合わせて1対1の即興的やりとりを試みた。「1. はじまりのうた」でやり取りのできた1人は、大学教員と1対1で太鼓を用いた即興演奏が出来たが、残り2人

は様々な打楽器に挑戦するか働きかけてみるもなかなか活動に参加できなかった。そのうち1人が「バンド系の楽器なら…」といい、シンバルを用意したことをきっかけに、ONE OK ROCKが好きだという話をし始め、《完全在宅 Dreamer》を演奏する流れになった。ピアノで《完全在宅 Dreamer》を演奏しはじめると、もう1人がカホンに座り、カホンや近くにあった太鼓を音楽に合わせる形で叩き始めた。また、最初に太鼓の即興をした生徒もカホンの後ろに座って、側面を叩くなどしはじめた。しかし、リクエストした本人は、別の曲をリクエストし、途中で演奏は止まってしまった。その後も、生徒の好きな曲と一緒に聴くなどしながら、最後は全員でブームワッカー、太鼓類、シンバル、ピアノで短い自由即興をして活動を終えた。

「3. 絵を描いて、音をつくって、みんなであわせよう」では、Chrome Music Labに入っているコンテンツで、描画したものに音がつく「KANDINSKY」を用いて、各自が描画したものの(音)を重ねる合奏を行った。この活動に参加できたのは2名の生徒であり、生徒たちは描画には抵抗のない様子で、中学校教員と一緒に音づくりをおこなった。この合奏をもって「自立活動」は終了した。

3. 振り返りと今後の課題

生徒たちは、積極的に活動に参加できる者と、場や相手の様子を伺いながら参加したり・しなかったりという者に分かれた。そうした抵抗を示す生徒も、自分の興味のあることならば、自分のできる範囲で活動に参加することができていた。

本取り組みは、生徒たちの実態を掴むことも目的とした活動だったため、楽器や人を乱暴に扱わないなど基本的・最低限のルールはあっても、集団をコントロールするようなルールは設定していなかった。そのためプログラムに沿って音楽活動が展開されるというよりも、生徒たちの言動を手掛かりに展開されたといえよう。

そのため、中学校教員からは、もっと自分たち(教員)が盛り上げていった方がよかったのかという疑問や、「こうしなければならない」という決まりが身近な生徒たちにとっては、そういった自由さが理解できておらず「何をしたらいいの?」と戸惑っているように見えたとの感想を頂いた。これは、アセスメント的な要素が強かった取り組みだったとしても、もっと教員と本活動の趣旨について共通理解を深めるべきであり、次回以降の課題である。一方で、はじめは強く拒否を示していた生徒が「いざとなると参加していたり、自分から話しかけたりなど、あまり緊張することなくいつもの&いつも以上の彼らの姿がみられた」との感想も頂き、生徒たちなりに参加の形を探っていたといえよう。今年度は、上手くスケジュール調整ができず、1回に留まってしまったが、現場の教員と大学教員とで協働しながら引き続き実践を重ねていきたい。